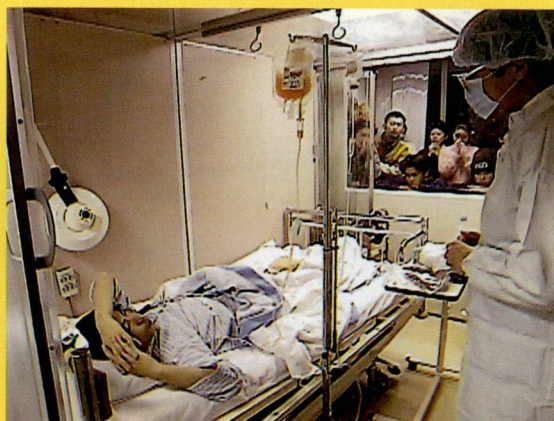


文部省選定

教育映像祭 最優秀作品賞

文部大臣賞



○ビデオ製作にあたって

白血病や重症再生不良性貧血などの治療のために健康な人の骨髄液を必要とする人は、日本で毎年約2000人いるといわれます。10万人以上のドナー（骨髄液の提供者）登録があれば、大部分の患者に骨髄移植のチャンスを与えることができるのですが、ドナーの数は6万人余り（1995年8月現在）で、まだまだ少ないのが現状です。

この作品は、ある患者の闘病過程を追いながら、骨髄移植がどのように行われたかを記録しました。ドナー登録した人、実際に骨髄を提供した人の話なども交え、映像を通して、将来ドナーとなる可能性をもつ若い人たちははじめ一般の人たちにも、広く骨髄移植への理解と支援を求めるものです。

また、現在ボランティアの在り方やその活動内容が様々に論じられ広がりを見せている中で、ボランティアの一例としても、理解を深める手がかりにもなるでしょう。

いのちの

ボランティア

骨髄移植

監修 —— 厚生省
後援 —— 財団法人
骨髄移植推進財団
製作 —— 桜映画社
提供 —— 中外製薬株式会社

規格 —— VHS・カラー・34分

販売価格 —— 16ミリ
230,000円（消費税別）
VHS
19,000円（消費税別）





毎日のように友人たちが病室を訪れ、彼を励ます



何かできることをしたいと、彼の散髪をする美容師仲間



「ドナーさんには、ほんとに感謝しております」と語る両親

このビデオの活用の場と方法

- 道徳、特別活動でのボランティア教育の授業で
- 保健体育や家庭科などの授業で
- クラブなどの課外活動や、生徒会活動のなかで
→ 病気への理解をうながすと同時に、いのちの尊さや他者への思いやりの心を育む。ボランティア活動への理解を深める
- 学校のPTA活動のなかで
→ 父母への理解をうながす
- 地域の保健所・保健センター・医療施設などで
→ 理解と支援をもとめる
- 企業・団体などで
→ ボランティア活動の一例として、職場での理解と支援を深める

◎ あらすじ

北海道から上京し、美容師として働く青年がいる。彼は、ある日突然、慢性骨髄性白血病の診断を受けた。彼のドナー探しから、このドキュメンタリーは始まる。

骨髄移植を受けなければ、近い将来確実に死を迎えると宣告され、もしかしたら明日にも急性転化して死に至るかもしれない大きな不安と闘う日々が続く。多くの友人たちがドナー登録をしてくれたが、適合する人は見つからなかった。

どこにいるのかあてのないドナーを待つこと2年、やっと適合者が現れた。しかし一般には、骨髄移植の成功率は約50%。その現実にも悩みながらも、彼は移植に生きる希望を賭けた。

そしてそこには、『究極のボランティア』ともいわれるドナーの善意に心から感謝し、移植の成功を願う家族や友人たちの姿もあった。

◎ 作品を見た人の感想から

- 骨髄移植とはどういうものか、看護婦志望でありながらあまりよくわからなかったの、知ることができてよかった。母親にも説明することができて、嬉しかった。(高校2年)
- テレビで見ても、骨髄提供者の立場があまりわからなくて、進んで提供したいと思えなかったのです。でもこの映像を見て、20歳になったら、自分も頑張ってバンクに登録しようかな、と思えるようになりました。(高校2年)
- 今まで、自分と無縁のものと思っていたけど、ビデオを見て、一人でも多くの提供者によって助かるいのちがたくさんあるのだと、考えさせられました。「ボランティア」について、考えさせられるビデオでした。(高校2年)
- 阪神大震災以来、高等学校の現場でも「ボランティア」という言葉がとびかっていますが、まだまだ内容がついていっていません。その意味で、いろいろなボランティアの広がりを生徒に理解してもらうためにも、タイムリーな教材だと思います。(高等学校校長)
- 命と命をつなぐ骨髄移植によって、人の心と心がつながれるような気がしました。ボランティアな行為ということを、改めて考えさせられます。(40代会社員)
- 患者さんの立場だけでなく、同時にドナーのことも取り上げてあったので、とても良かったです。ほとんどの患者さんが骨髄移植を受けられるような社会に、早くなくて欲しいです。(高校3年)

協力 — 東京都立駒込病院
東京女子医科大学
日本赤十字社中央血液センター

スタッフ — 製作＝村山英世
脚本・演出＝原村政樹
撮影＝中井正義／山屋恵司
VE＝小原静二
編集＝戸嶋志津子
MA＝アオイスタジオ
語り＝原田芳雄